

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

| | |
|------------|---|
| Title | 櫛木温泉句三昧 : 文苑 |
| Author(s) | 瓢郎; 紅鱒; 岸三; 李王; 戦車; 不割石; 巨足; 桔槔 |
| Citation | 龍南會雜誌, 120: 81-84 |
| Issue date | 1907 |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| URL | http://hdl.handle.net/2298/6028 |
| Right | |

春の風もゆる腫と花の頬の君よりふきぬ時めく胸に
春の磯うゝほどよみて浪ちりぬ沖なる船を見てある人に
青葉若葉見る目すゞき初夏のあけぼのゝ野を美しと見る
高嘶くや阿蘇の御牧を震はして東へ驅けぬ若駒五百

櫛本温泉句三昧

三月廿九日

桶の底の浮へるに落つ椿哉 瓢郎
春の水わかれて草の中に入る 紅鱒

三十日

崖の岩下滴りや水草生ふ 岸三
甕に引く笥に李散りに鼻 瓢郎
湯の樋の湯氣滴りて木の芽吹く 全

三十一日

雨の夜遅く戦車李王来る。
山の湖畑ありて鳴く雲雀かな 李王
網二重雲雀の籠を吊しけり 紅鱒
梨の花棚にのびたる若き枝 全

四月一日

揚雲雀砂に植ゑたる菜蔓の列 全
群生の土筆や射朶の古き酌 岸三
大樫の下に梨花あり羊小屋 全
狗脊や半ば開きゝ雑木山 瓢郎

溜水池廻りて低き椿かゑ 戦車
材木を迂らす峽の椿かな 全
社の前の濕める芝生や五形花咲 全
湯の小屋と崖の間や落椿 李王
樹々浸す潭や椿の落ちる 全
朝風呂や目に近きもの小米花 岸三
庭園の芝生に銀杏葎す 全
若草や剝げて落ちたる藏の壁 全

文

石垣に根太き椿紅まだら
 輪の取れし桶に植ゑ鳧白躑躅
 木蓮や石菖の根に吹かれ寄る
 葉は刈りて束ねぬ畑開き
 枝の先一つ木蓮の蕾かな
 全 全 全 全 紅 紅
 岸三 瓢郎 瓢郎 瓢郎 鱒 鱒

二 日

砂堀れは水湧く濱の杉菜哉
 上り蠶を灯に透かす選り分る
 繁縷や花壇に枇杷の自然生へ
 菊若葉芽を食ふ虫を水に掃く
 虎杖の葉裏に虫の袋かあ
 田の杉菜草履の裏に土あつし
 藏引きし跡一面の杉菜かあ
 鍋を研ぐ鉋丁に蜂を追ひに鳧
 萑畑や鯛の尾はりし流しの戸
 繁縷や田川の畔の樋枕
 蛇唸る草山低し庭の中
 菊若葉竹に仕切りし花壇哉
 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全
 岸三 岸三 岸三 岸三 岸三 岸三 岸三 岸三 岸三 岸三 岸三

三 日

木爪の鉢五色の貝を撒きに鳧
 鹿孕み尾上の櫻散り盡す
 蒲公英や豆腐漉したる帛を干す
 囀りや煙艸に煙る室開ける
 沖の岩雨に釣れけり櫻鯛
 燕の糞たらされぬ越後獅子
 松の花小松の多き砂地哉
 提灯で數へてせるや櫻鯛
 砂のつく目荒らき籠や櫻鯛
 春蘭の花やぬれたる砂の落つ
 石燈籠油に散れる松の花
 春蘭や芽の無き木々に青き苔
 椎茸を乾す竹筵松の花
 土たまる塀の瓦や花薺
 蒲公英の芝に車の痕深し
 囀りや金竹の藪川を蔽ふ
 全
 岸三

四 日

女

嘲りや蛤横に舌を出す 紅鱗

桃の宿湯に足そぐ泊かな 全

山の皴廣く末黒の芒哉 全

種子藏に吊りし穂黍や桃の花 岸三

青塚に一株萩の若葉哉 全

蛤や紫古き羊齒の籠 全 戰車

桃咲くや春の河鹿をさく小村 全

色褪せて樹脂ある桃の落花かな 全 瓢郎

大船を圍ふ藁屋根桃の花 全

並べ繋ぐ鹽積馬や花薊 全 李王

叢に泥水たまる薊かち 全

壘につめて鑛泉賣るや桃の花 全

山の宿廠ほす日や桃の散る 全

蛤鍋の看板横に鰻提灯 全

蛤鍋の七輪あふぐ我火哉 全

五日

花大根馬車に一駄の乾魚哉 岸三

口そぐ樹下の流や蛇の聲 瓢郎

蕙あむ椋の木獨樂や花大根 全

割竹の圓き埒ある櫻哉 全

庭せまく葛乾す日和蛇のとぶ 李王

炮烙に煮胡麻煙る夏近し 全

山の柴刈り盡されて夏近し 全

畑匍ふ辨慶蟹や花大根 全

尾張村に銀行あるや花大根 全

(南禪寺)

山吹や煉瓦にたぐむ渠高し 戰車

筆賣の役場まわりや花大根 全

瓦盆廢蓋結ぶ契や花大根 全

繪乞食の瓢箪畫くや櫻散る 全

耳樽の耳持つて舞ふ櫻かな 全

天水の大きな釜や櫻散る 全

行春や酒に酔ふ人日に歩りく 全

福州の泣學校や暮の春 全

植ゑかへの櫻を起す人数哉 紅鱗

親猿の櫻に上る後向き 全

死

大男白こかし行く落花哉 全

六 日

鷹賣りの脂に大籠や稗袋 岸三

店の奥綿ふみ居れば鷹の琴 李王

下げて行く月琴鳴るや海棠花 紅鯨

節折つて湯をとほしけり蓮若根 瓢郎

三月三日例會(箕踞洞)運座一回作者九人選者九人李王二十八点、紅鯨瓢郎二十一点、戰車十三点、不割石九点、番外巨足十六点以下畧以下畧

轉りやあけ放ちたる佛の間 李王

曲水に折からの落花夕日かな 全

轉りや重れて温き小鳥籠 全

曲水や七歩の才の矢繼速 紅 轉

轉りや松笠多き松の枝 全

飯蝸の頭にかげし酢味噌哉 全

轉りや砲臺の道松まばら 瓢郎

人の手によりて青きを踏む子哉 全

齒の点に頬髻剃りぬ二日灸 全

濱廣う飯蝸ついて廻りけり 戰車

二日灸臍下にすねて力みけり 全

開山忌夜に入る寺や雁歸る 不割石

轉りや帆木綿を干す浦の家 巨足

土鍋冷めてわびしき宵を雁歸る 全

曲水や階近き桃の枝 岸三

轉りや僧房の朝静かなり 結 檉